

徐志摩の翻訳作品に見られる欧化現象について

関 光 世

要 旨

本稿では、清末から民国初期に始まった英語との接触により、中国語がその書記言語において受容した所謂「欧化語法現象」の特徴の一端を解明することを目的として、特に徐志摩の翻訳作品をとりあげ、“当…的时候”、“它（它們）”、接尾辞“们”、接続詞“和”の4項目について例文を収集・整理し、これらの欧化現象が観察された時期・使用頻度及び用法上の特徴の三点から、先行研究の基礎に立って考察を加えた。

その結果、従来の研究では「欧化の程度が高い」と考えられてきた徐志摩だが、その欧化の程度や定着の度合いが客観的に測定されていたわけではなく、掘り下げた研究がなされていない点を指摘した。また、これまで指摘されなかった徐志摩における欧化現象の定着例を確認することができ、欧化現象が観察された時期や使用頻度の変化という点で、従来の理解を塗り替えるに足る根拠を示すことができた。さらに、一部の欧化表現において、徐志摩独特の用法を確認した。

本論で示した例文は、これまでに指摘されなかった新しい資料として、今後の欧化研究への貢献が期待できる。

キーワード：徐志摩、欧化、翻訳、定着、白話文

1 はじめに

徐志摩は、1897年に浙江省海宁县の実業家の長子として生まれた。江南一帯で広く事業を展開していた父親は、彼が3歳になると私塾に通わせるなど、早くから高いレベルの教育を受けさせた。《徐志摩未刊日記》によると、13歳のころには杭州府中学で“文法”、“会话”、“读本”からなる英語教育を週に8時間（480分）履修している。1922年、アメリカとイギリスでの4年間に及ぶ留學生生活を経て帰国した徐志摩は、直後から意欲的に白話を用いた作品を発表し始める。彼の文体は「親しみやすい」、「わかりやすい」と評価される反面、「ぎこちない」と批判を受けることもあったが、現在では、西洋言語の影響を受けて生まれた欧化現象が中国語に定着する時期の代表的な人物とみなされている。（穆木天 1934, 大原 1994）

「欧化」とは、王力（1943）によれば「西洋文化の影響を受けて生まれた中国語の新しい語法」である。本論では、王力及び王力以降の欧化研究でも踏襲されているとおり、「欧化」を比較的広い意味で捉え、「中国語の書面語に見られる、西洋語の影響を受けて生まれた、或いは五四以降に西洋語の影響により急速に普及した新しい語法」と理解することにする。

欧化問題について、言語学的な角度から最初にまとまった記述を行ったのが王力である。王

は《中国現代語法》(1943)、《中国語法理論》(1944)、《漢語史稿》(1958)の中で「欧化現象を記述することに留め、その是非は極力論じない」¹⁾という態度を表明しつつ、徐志摩については次のように評している。

“基于文人对于西洋语言涵泳的浅深，和他们的个性同化的难易，而他们的文章的欧化程度也有高低的不同，例如鲁迅的文章欧化程度浅，而徐志摩的文章欧化程度就深多了。其中又有变质的欧化，就是不通西文或西文程度很浅的人只知道从中国的欧化文章里去模仿，久而久之，渐渐失真。…本章对于那种变质的欧化语法，只好存而不论了。”（文章に見られる欧化の程度は、作者の西洋語に対する理解の深さや、個性が同化しやすいか否かで異なる。例えば、魯迅の文章は欧化の程度が低く、徐志摩の文章は欧化の程度がずっと高い。その中には変質した欧化もある。それは、西洋語に通じていないか理解の浅い人が欧化した文章を真似ているうちに、次第に真の姿を失ってしまったのだ。…本章ではそのような変質した欧化語法は放っておいて取り上げないのみだ。）(1944 p435 日本語訳及び下線は筆者による)

上の指摘には些か批判的・否定的なニュアンスが感じられる。その結果、「欧化の程度が高い」という言葉は徐志摩の枕詞となり、あたかもそれが正しくない事のような印象を与えてきた(余光中 2002)。しかし、王の記述を見わたしても、徐志摩の欧化例が数の上で突出しているとは言えず、全ての欧化現象に彼の例が挙げられているわけでもなく、このような評価に至った具体的な根拠は示されていない。さらに王力が挙げた徐志摩の例文は、1925年の《巴黎の鱗爪》と1926年の《我所知道的康橋》の散文二作に限られる。あまりに偏ってはいないだろうか。その後の欧化研究でも徐志摩の例はほぼ扱われず²⁾、賀陽の《現代汉语欧化语法现象研究》(2008)に至っては1例も挙げられていない。

賀陽(2008)は王力の指摘を起点にしつつ、個々の欧化現象が五四以降に出現或いは増加したのか、書面語のみに見られる現象か、その出現と増加が印欧語の影響によるものか、の三点について膨大なコーパス³⁾を利用して調査し、王力以降の欧化研究において指摘された実証性の不足という点を一定程度克服し、欧化か否かの判断に実証性の高い根拠を示した点で画期的である。

そこで本稿では王力の指摘を起点に、個々の欧化現象について徐志摩の翻訳文に見られる例文を整理し、賀陽(2008)で示された統計資料との比較対照をとおして、彼の文体に見られる欧化現象について検証することにする。

本稿で徐志摩の翻訳作品だけを取り上げる理由は以下の二点である。第一に翻訳は2つの言語の接触によって起った受容の結果を最も早くかつ鮮明に反映する資料だと考えられるからである⁴⁾。徐志摩における英語の影響は、母語である中国語で書かれた散文や小説よりも、翻訳

作品において多く、かつ時期的に早く見られるはずである。第二に、周知のとおり徐志摩は1931年に事故死したため、彼の作品はほぼ1920年代に限定される。1920年代の中国語における欧化の様相を調査するにはまさに絶好の資料であると言える。

本論が調査の対象とする徐志摩の翻訳作品は下表1「徐志摩翻訳作品一覧」に挙げた短編小説14作及び長編小説2作の合計16作品、約二十万字である⁵⁾。

表1 徐志摩翻訳作品一覧

発表年	題名(邦題)	文字数
1923	一个理想的家庭(理想的な家庭)	4,486
1923	巴克妈妈的行状 (パーカーおばあさんの生涯)	4,936
1923	园会(園遊会)	11,546
1925	夜深时(夜も更けて)	1,657
1925	生命的报酬	5,393
1925-1926	赣第德(カンディード)	59,238
1925	幸福(幸福)	8,231
1926	刮风(風が吹く)	2,910
1926	一杯茶(一杯のお茶)	5,487
1927	毒药(ポイズン)	3,965
1928	玛丽玛丽(マリー マリー)	70,269
1928	万牲园里的一个人(動物園の男)	7,289
1930	蜿蜒:一只小鼠(鼠 その幻想)	5,130
1930	苍蝇(蠅)	3,899
1930	Darling	3,486
1931	半天玩儿	10,438
計		208,360

2 “当…的时候”を巡って

2.1. “当…的时候”と“当”の接続詞用法

現代中国語で「…する(した)時」という時間を表す従属節に用いる“当…的时候”の“当”は、旧白話ではほとんどみられず、英語の“when”や“as”に充てて翻訳したことから使われるようになったと言われているが⁶⁾、王によると“的时候”を伴う場合は純然たる欧化とは言えない⁷⁾。

この点について、賀阳の調査では、使用頻度の向上が1930年代から顕著になること、書面語資料は口語資料より使用頻度が高いこと、英語からの翻訳作品では中国語をオリジナル言語とする作品よりも使用頻度が高いことなどが確認できたため、彼はこの現象は欧化であると結

論づけた⁸⁾。

王は“的时候”を省略して“当”を接続詞的に使った“当我再看，我看不见什么。”のような例こそ純然たる欧化だと考えていたが，賀阳の調査では，これらは《红楼梦》など旧白話では皆無だったのに対し，50年代以降の作品で例が確認されている⁹⁾。つまり“当”の接続詞的用法の使用は“当…的时候”の使用頻度の向上より少し遅れて顕在化している。そこで賀阳は，この2つの用法に関して，30年代から英語の接続詞“when”や“as”に充てて介詞“当”を使用し始め，まず“当…的时候”の使用頻度が高まり，次第に“…的时候”が省略されるようになったという変化の過程を推測しているが，使用頻度向上の時期のズレと“当”の使用の経緯から考えても合理的な説明と言える。

2.2. 徐志摩に見られる“当…的时候”と“当”の接続詞用法

徐志摩の翻訳作品には“…的时候”や“…时”の用例が頻出する。たとえば《玛丽玛丽》(1928年)では“当”を使用しない“…的时候”56例に対し，“当…的时候”は3例のみで，5%程度にすぎない。これは賀阳の統計における1920年前後の作品と同程度である¹⁰⁾。翻訳作品全体でも“当…的时候”が7例，“当…”は4例しか見つからない。徐志摩の中では使用頻度の向上は顕著ではなく，「使用頻度の向上は30年代以降に始まる」という賀阳の調査結果と一致する。以下例を示す。(例文中の太字と下線は筆者による。以下同じ。)

“当…的时候”

- 1) 正当那时候流行非洲亚洲欧洲的大瘟疫，到了阿尔奇亚斯，凶恶极了的。《赣第德》
- 2) 正当巴拉圭的本地人在田场叫太阳晒着，用木头碗吃小米饭的时候，神父司令回到他的园子来休息了。《赣第德》
- 3) 当这少年叙述的时候喀佛底先生狠庄重的时时用他右手的拳头使劲的打他的左手，并且要求把那个打人的人交给他。《玛丽玛丽》
- 4) 当他说话时他偷偷的瞧她的脸，玛丽也在偷瞧他的脸，在他们发现彼此同时做这个事情的时候，两人立刻望他处看了，那个少年便走入自己屋子去了。《玛丽玛丽》
- 5) 沿岸的绿草长得非常茂盛，当这时令，岸上为日光所熏，这确是一块闲坐的好地方。《玛丽玛丽》
- 6) 她可以想像她妈这时必是头昏目眩的坐在床中，怀疑，恼怒，惊惧，揣想意外和恐怖，当她进去时；这时她陡然起一个冲动，心想轻轻的把门开了，进去放下食物，逃下楼梯，出去无论到天涯海角，永远不再回来。《玛丽玛丽》
- 7) 正当那一天地皮又来了一次最暴烈的震动。《赣第德》

“当…”

- 8) 但是当她注意到费司老是拿什么东西往她的紧身里塞似的那怪脾气一倒像是她那儿也

有一个藏干果的小皮袋一培达急得把手指甲在她的手背上直招单怕掌不住笑太过分了¹¹⁾。 《幸福》

9) 正当这已往的伤惨显现在他的眼前，他又觉察到了那小耗子。 《蜿蜒：一只小鼠》

10) 当她仰面躺著，珠项链兜著她的下巴，叹了一口气说，“我渴了，亲爱的。给我一个橘子。”我真情情愿的往水里跳到大鳄鱼牙缝里去拼一个橘子回来—要是鳄鱼口里有橘子的话¹²⁾。 《毒药》

11) 因为当他们俩散步到了一条冷清的街上那巡警就用一大堆的恭维话来补充他的敷衍的学问，为要找到一种适当的征象他蹂躏了天，蹂躏了地，也不放过深深的大海。

《玛丽玛丽》

徐志摩では、上のように“当…的时候”と“当…”が並行して同程度使用されている点が興味深い。上述したとおり、まず“当…的时候”が出現し、その後“…的时候”が省略されて“当…”が現れるという流れが合理的に思えるが、彼は、少数とはいえ少なくとも“当…的时候”も定着しない段階で、英語の“when”に“当”を充て始めると同時に“…的时候”を省略し、一足飛びに、40年代に王力がまだ市民権を得ていない¹³⁾と考えていた“当”の接続詞的用法を使用している。これは、翻訳において常に読者を意識し、わかりやすさを追求して訳語に試行錯誤を繰り返して徐志摩らしい柔軟性の現れであろう。“当”の接続詞的用法は1950年代の例が挙げられているのみなので、この用法においては従来考えられているより早い使用例が確認されたことになる。

“当…的时候”の使用の時期において徐志摩は未だ定着していないが、“当”の接続詞的用法を同時に使用し始めた点が特徴的である。

3 無生物三人称代名詞“它（它們）”について

3.1. “它”と“它們”の欧化

賀阳の統計によると、無生物三人称代名詞“它”は、旧白話小説では全く見られなかったが、老舍の《骆驼祥子》では女性を指す“她”とともに使用例が確認されている¹⁴⁾。使用頻度の向上は顕著である。これは英語の“he”, “she”, “it”の影響による三人称代名詞の性別による分化現象で、欧化であると理解されている。さらに中国語では“他”と“她”がそれぞれに複数形を持つことから、英語の“they”を模倣せず、同様の接尾辞を用いて複数形“它們”を使用するようになり、英語よりも細分化された中国語の人称代名詞群が完成した。

王力は、“他”の性別による分化に対しては「実用の面でとても便利だ」、「混同しなくてすむ」(1944, p268)と述べてその実用性を評価したが、“它”や“它們”を多用することについては、当初警戒感を示していた。しかし急速な普及を前に、わずか十数年後には「規範的な白話によ

る著作にも見られるようになった」と嘆いている¹⁵⁾。王力が「規範的な白話による著作」として挙げた早期の例は1925年に発表された魯迅の1例のみである。また、賀阳は三人称代名詞の性別による分化の急速な普及と定着を「20年代の半ばから後期には多くの著名な作家や文化人が使用したことで広く普及し、次第に社会的に承認され、50年代には現在の人称代名詞の形が定まって今日に至った。」(p66)と語っているが、彼の言う「著名な作家や文化人¹⁶⁾」に徐志摩は含まれていない。“它”と“它們”の欧化について20年代半ばの使用状況については十分に検証されているとは言えず、例も少ない。“它”及び“它們”の早期の使用例としてこれまで紹介されたものには魯迅(1922)、冰心(1923)、朱自清や茅盾(1928)などがあるが、いずれも1, 2例が挙げられているだけで、彼らの中でこの用法がどの程度定着していたかは不明である。

3.2. 徐志摩の例

(1) 使用の頻度

徐志摩の翻訳作品に見られる三人称代名詞の出現数を、発表された年代順に並べてみると右の表のようになる。

無生物代名詞“它”と“它們”は、1925年に発表された《幸福》以降、徐々に使用頻度が向上し、全体では196例が観察され、全体に占める割合は4%にのぼっている。

“它”が初めて観察された1923年の《园会》では、例12, 13のように無生物(下の例は樹木や花)を“他”で指す例も散見されたが、《幸福》では見られず、“它”に統一されている。つまり老舍の《骆驼祥子》から10年ほど遡った1925年ごろ、徐志摩の中では無生物三人称代名詞“它”の使用が一定程度定着していた¹⁷⁾ことが伺える。

表2 三人称代名詞の作品別使用数(割合)

発表年	作品名	他	她	它(它們)	計
1923	理想	126	39	0	165
1923	巴克	83	138	0	221
1923	园会	116	232	7 (4)	355
1925	夜深时	32	4	0	36
1925	生命	71	163	0	234
1925	幸福	98	240	7 (0)	345
1925-26	赣第德	1,402	228	21 (9)	1,651
1926	刮风	28	65	4 (0)	97
1926	一杯茶	46	182	4 (1)	232
1927	毒药	10	81	6 (0)	97
1928	万牲园	220	22	33 (23)	275
1930	小鼠	179	59	53 (2)	291
1930	苍蝇	130	7	25 (0)	162
1930	Daring	223	19	2 (0)	244
1931	半天	358	157	34 (12)	549
	計	3,122 (63%)	1,636 (33%)	196 (51) (4%)	4,902
1936	骆驼祥子	77%	20%	2%	(参考)

《园会》における使用例

12) 可是那些喀拉噶树得让遮住了。他们多么可爱, …。

13) “是我定要的。这花儿多么可爱?” 她挤紧着老腊的臂膀。“昨天我走过那家花铺子,

我在窗子里看着了。我想我这一次总要买他一个痛快。

《幸福》における使用例

- 14) 那边靠墙的一头，有一株高高的瘦瘦的白梨树，正满满的艳艳的开著花；它那意态看得又爽气又镇静的，冲著头顶碧匀匀的天。

さらに、下例 15, 16 のように“它”と“它们”のいずれも「かなり多用している」という印象を受ける箇所が複数存在する。

- 15) 但不久他又宽松了下来，因为那小耗子实在是一个极招人的小东西，他对它不由的发生了一种容忍的趣味。它的走动是古怪的一顿一顿的急窜，不时歇下来摩挲它的脑袋或是摇晃它的晶亮的耳朵；它的耳朵简直是透明的。它一眼描着了一块红的余烬，它就不猜疑的跳了过去……尖着鼻子嗅……嗅……直到它烫着了吓了一跳回去了。它会学一个猫似的蹲着，在火温里闪闭着眼，或是疯魔的急跑着像是跳舞，然后侧身一滚，横躺着把它那柔软脚爪擦着它的脑袋。那位愁人尽看着它，看它一样样卖弄它的把戏，到临了它似乎要休息了，就在它的后股上出了神似的坐着，坐得正正的，神气异样的灵通，像一个稀小的哲学家，然后煤块又哗的一声吊了下来，那小耗子又不见了。
《蜿蜒：一只小鼠》

- 16) 他看出了所有的猴儿，象，熊都会这样妒忌的。它们平常是靠看客们喂的，现在忽然的冷落了不理睬它们，它们如何能不恨。这些畜生都是贪馋得没有知足心的，而且它们到口吃的愈是难得消化，它们愈是非得把它们的馋壑给填满了。豺狼的妒忌又是一种，因为它们总是在看客里挑中它们特别喜欢的人，要是这些人不理睬它们，它们这才发酸了。
《万牲园里的一个人》

このように、20年代半ばにはすでにまとまった数の“它”及び“它们”の使用例が存在することから、徐志摩においては、この時期すでに一定の使用方針のようなものが定着していたと考えられる。従来の研究で十分に示されなかったこの時代の使用例を補充するものである。また、上のような多用例は当時としてはかなり際立っていたと推測でき、前述した王力の警戒感、徐志摩に向けられたものではなかったかとすら思われる。

(2) 用法上の特徴

徐志摩において“它”と“它们”が指すのは、動植物、人体（及びその一部）、建物などの有形物、そして王が「極めて稀である」（1943 p367）とした無形の「物」である。中でも以下のように「幸福感」「正義」「心」「災難」「生活」といった無形物や抽象的な概念などは他の例を知らず、極めて稀である。

- 17) 这来她那一阵**快活**又回来了，她又不知道怎么办才好—不知道拿走它怎么办。(すべての**幸福感**がよみがえってきた，そしてまたも彼女は，それをどう表してよいのかしら—どう処理したらよいのかわからなかった。¹⁸⁾ 《幸福》
- 18) 在这盘帐里我不仅要把破产全放进去，我也要把**法律上的公道**并了算因为它抓住了破产的东西来欺骗债权人。(破産と，それに破産者の財産を差し押さえて債権者を踏み倒す**裁判** (正義：筆者による)¹⁹⁾ についても，同じように考えて良いのではないか?) 《贛第徳》
- 19) 要懂得**人心**的变幻，使它在相当的境地有相当的表现；(**人間の心**を知り，人間の心に語らせなければならず…) 《贛第徳》
- 20) 这是一个故意的**侮辱**，他说。…要是不理会它，学会本身就非得受外人的讥评。(これは，ことさらに侮辱である，と氏は断言しました。…もし協会が甘んじてこの侮辱をうけるなら，世間のものわらいになるだろう。) 《万牲园里的一个人》
- 21) “喔，**你的心**跳得什么似的！它跳得真不真—它跳是为了谁？” 《蜿蜒：一只小鼠》
- 22) 哑已经对他说了再会，这在他看来就像是眼见一种**怕人的大难**快要来到他可一点没有能力去防守它。 《半天玩儿》
- 23) 他的整个心现在就想去进这花花的世界，把他**自己的生活**，总得想法子管它怎么样，和这些年青的仙女们的生活打成了一片。 《半天玩儿》

贺阳は，旧白話（《红楼梦》前80回）と当代の作品で使用された無生物三人称代名詞が文中で主語，目的語，連体修飾語となる割合を調査し，旧白話以降，西洋語の影響で，主語になる“它，它们”の割合が急増したことを示した。同様の観点から徐志摩の作品を調査したところ，主語になるものは167例中61例で37%を占めた。賀の結果と合わせてまとめると表3のようになる²⁰⁾。

表3から，使用された無生物三人称代名詞が担う文の成分という点で，徐志摩は20年代の段階ですでに当代作品へと大きく踏み出していることがわかる。連体修飾語となる場合が比較的多いのが見て取れるが，例24から26に見られるように，描写性の多項目連体修飾の最初にしばしば用いられるのが特徴的である。

表3 文の成分別使用例数

	主 語	目的語	連体修飾語	計
《红楼梦》	6 (9.4%)	55 (85.9%)	3 (4.7%)	64
徐志摩	61 (37%)	56 (33%)	50 (30%)	167
当代作品	171 (63.3%)	58 (21.5%)	41 (15.2%)	270

- 24) “喔，潘葛洛斯！”贛第徳叫了，“多么古怪的一个家谱！**它那最初的由来**不就是魔鬼吗？” 《贛第徳》

- 25) 我们并且还得注意, 在这大陆上这怪病就像是宗教的纷争, 它那传染的地域是划得清的。
《赣第德》
- 26) 他们在狮屋慢慢的一个个笼子走过去, 看到了一只老虎, 在笼子里走上走下, 走上走下, 走上走下, 扭着它那画着花的脑袋看人, 怪相, 仿佛它跟你是极热的似的, 它那拉腮胡子²¹⁾直刮着墙。(…虎はがまんできない狎れ狎れしさで, その色鮮やかな大頭をまわし, そのひげで煉瓦の壁をちょっとかすって, いったりきたり, いったりきたり, 歩き回っていました。)
《万牲园里的一个人》

徐志摩の“它”と“它們”の使用における用法上の特徴は、両者が抽象的な観念や無形物を指す点、複数形の“它們”が多用される点、“它”と“它們”が文中で果たす役割の三点について、すでに現代漢語における用法に近い。これは20年代としては際立っていたと言える。

4 接尾辞“们”について

4.1. “N + 们”の欧化

複数を表す接尾辞“们”の用法について王力は次のように述べている。

“‘们’字表示复数, 除用为人称代词后附号之外, 只能用于人伦的称呼^①。所以以前只说‘姊妹们’, ‘丫头们’, 不说‘和尚们’, ‘神仙们’。自从欧化之后, ‘们’的用途渐渐扩充至于行业。例如‘作家们’, ‘工人们’, ‘农夫们’等。又‘人们’, 泛指一般人, 常用为无定代词^②。欧化的中国语似乎倾向于把人的复数都加‘们’字^③, 但是这种用途至今还不很普遍。例如‘好人们’, ‘委员们’都还不大听见说。说不定三五年以后就会达到那一个程度的。至于物类的复数, 却还没有人试加过一种后附号^④。” (1944 p463)

王はここで「人称代名詞と人倫呼称²²⁾ (下線部①) 以外の人を表す名詞 (以下N) に接尾辞“们”を付加して複数を表す用法は欧化である」という見解を示している。しかしこれまでの研究で、明代以前から人倫呼称以外にも「人を表すN + “们”」の例が存在し (崔山佳 2013 p544), 《水浒全传》前40回では「人倫呼称 + “们”」よりも多数を占めていたことが明らかになっている²³⁾。また、「物の複数を表すには、まだ誰も接尾辞の付加を試みたことがない」(上記下線部④)との指摘についても、1920年代以降の魯迅や老舎に“蟋蟀们”, “蜜蜂们”, “虫儿们”, “星星们”などの例があり²⁴⁾, これらはいずれも擬人化を目的とした修辭的用法として使用されるに留まり、中国語の伝統的な用法から逸脱しないとされている (賀 2008 p192)。

これらを考え合わせると、接尾辞“们”の用法は欧化によって劇的な変化を遂げたとは言いが、王は具体的な根拠は示していないものの「欧化した中国語はあたかも人の複数はにみ

な“们”をつける傾向にあるようだ(上記下線部③)とその使用範囲の拡大と使用頻度の向上を実感していた。さらに不特定多数の「人々」を指す“人们”について、王は欧化によって確立されたものだと考えた(下線部②)が、この点についても、これまでに十分な検証はされていない。

4.2. 徐志摩の例

徐志摩にもN(人称代名詞は除く)+“们”は多数見られる。長編小説《贛第德》約59000字にはN+“们”が77例、《玛丽玛丽》約70,000字では66例が確認できた。翻訳作品全体では約208000字中237例、Nの種類は73種類にのぼり、そのうち「人」を表すNが66種類、「物」を表すNは7種類だった。

(1) N=人の場合

徐志摩の翻訳作品ではNが人を表す例が圧倒的多数で、「人倫呼称」「業種・職業」に分類²⁵⁾できる例が半数を占めるが、分類しきれない「その他」が約半数を占める。この中には王に否定された「神仙们」(徐では“仙女们”，同様に否定されるものとする)や“委员们”も含まれ、一方で、すでに旧白話での使用例が見つまっているもの(“先生们”)もある。

【人倫呼称】儿女们 女儿们 女太太们 太太们 老太太们 老爷们 爷儿们 爷们
老前辈们 老祖宗们 亲戚们 儿子们 孩子们 夫妻们 姑娘们

【業種・職業】工人们 诗人们 水手们 大兵们 兵士们 武士们 乐师们 总督们
王后们 官人们 法官们 大法官们 职司们 神父们 牧师们 和尚们
乞丐们 海贼们 仕女们 下女们 下人们

【その他】少女们 女人们 妇女们 娘们 女孩子们 男子们 男人们 先生们
街孩们 年轻人们 绅士们 读者们 居民们 邻居们 同事们 同伴们
朋友们 仇人们 情人们 情侣们 委员们 同事们 仙女们 英雄们
客人们 观客们 看客们 游客们 百姓们 人们

上述したように、すでに20年代の魯迅や老舍の例が紹介されているため、徐志摩の使用時期が早かったとは言えないが、単独の作家としてはまとまった数のNが見つかったと言え、徐志摩の中では少なくともN=人の用法は一定程度定着をみていたと言ってよいだろう。

また、“人们”の最初の例は1923年の《园会》に見られ、1926年以降の作品と合わせて合計26例が確認できた。《贛第德》(6例)、《玛丽玛丽》(16例)、《蜿蜒：一只小鼠》(1例)、《半天玩儿》(3例)である。使用数から見て、定着していたとは言い難い。その中でも下の例32、33のように、定語の修飾を受ける中心語として用いられる例が目立つ。

- 27) 她站了一会看看人们纷纷的拥挤到丽华戏院里去。 《玛丽玛丽》
- 28) 马丁说, “这就是人们彼此相待的办法。” 《赣第德》
- 29) “弄上污点去的都是人们自己,” 赣第德说, “他们可又是不能少的。” 《赣第德》
- 30) 你的潘葛洛斯用什么法码来衡人类的不幸, 能公平的估定人们的苦恼。 《赣第德》
- 31) 还有那些玫瑰花, 她们自个儿真像是懂得, 到园会的人们也就只会得赏识玫瑰花儿;
《园会》
- 32) 她自己走出了门, 下了走道, 经过那些黑沈沈的人们。 《园会》
- 33) 他告诉她许多故事, 那种令人惊骇的故事, 讲到打仗与诡计, 一生专弄诡计的男女, 除了偷盗和强横不知别的事情的人; 天生会偷盗的人们, 专靠诡计和偷摸吃喝的人们, 用骗术结婚的, 由古怪, 低陋的路径走到死境的人们。 《玛丽玛丽》

(2) N=物の場合

【動物】狗子们 猴子们

【動物(類)] 畜生们 生灵们

【無生物】魔鬼们 东西们 小把戏们

徐志摩の作品において「物」を表す名詞の例は全体で7例のみだった。この種のNには「動物」(例 34, 35), 動物の「類」を表す名詞(例 36, 37), 無生物(例 38, 39, 40)がある。Nが「物」の場合は従来の指摘と同様擬人化を意図した修辭的用法が見られる。また, 無生物²⁶⁾であっても, 例 39, 40のように, 間接的に既出の人を指すという特殊な文脈の支えがあれば, 無生物に“们”を付加している。

- 34) 他于是热心的希望那狗子们打架。 《半天玩儿》
- 35) 因为满车子人全叫我的乖猴子们给弄糊涂了, 有一个男人眼珠子都冒了出来, 像要吞了我似的。 《幸福》
- 36) 初起柯玛蒂听了这话有些不信, 但后来等得他知道了一些和他的共同囚禁着的生灵们的性格, 他才明白这本是极平常的事。 《万牲园里的一个人》
- 37) …再迟些野畜生们的叫噪更来得响亮了, 此唱彼和的叫个不停。《万牲园里的一个人》
- 38) 赣第德的纸帽与圣盘尼托衣上画着尖头向下的火焰与没有尾及有长爪的魔鬼; 但潘葛洛斯的魔鬼们却都是有尾有爪的, 并且火焰的尖头是向上的。 《赣第德》
- 39) 当然不能人人都有一个当巡警的侄子, 有许多人还不愿意同巡警有一点关系哪。强横筋道的东西们, 拿谁都当做贼看! 《玛丽玛丽》
- 40) “冲我的知识, 一个女人顶好的药就是孩子们。他们不让你有生病的工夫, 那种小把戏们! 《玛丽玛丽》

徐志摩は翻訳において、複数を表す接尾辞の“们”を初期の頃から人を表す名詞に使っており、その用法はすでに一定程度定着していたと言える。また、徐志摩は擬人化を意図した場合には動物や無生物にも大胆に“们”を付加しており、柔軟性が感じられる。いずれの場合についても1920年代における単独の作家の使用例としては例をみないまとまった数の例を収集することができた。

5 接続詞“和”について

5.1. “和”の使用頻度の変化と機能の拡大

現代中国語において2つの語句の並列関係を表す場合、等位接続詞“和”などを間に挟んで“A和B”（以下便宜上これを「A和²⁷⁾B型」と呼ぶことにする。）などとするのが一般的だが、賀陽によると、旧白話小説における接続詞の使用・不使用の割合はおよそ2:8で、この頃までは接続詞を使わずにAとBを並べるかたち（以下「AB型」）が主流だった²⁸⁾。

王は40年代の時点で等位接続詞の使用頻度の向上を指摘し、それが英語の影響による欧化であるとの認識を示した²⁹⁾が、根拠が明確でなく実証性に欠けた。のちに賀陽が統計によって老舍の《骆驼祥子》(1936年)における接続詞の使用・不使用の割合が8:2に逆転していることを示し、王の感じていた使用頻度の向上説が裏付けられた形となった。つまり30年代半ば頃には等位接続詞の使用頻度は大きく向上していたことになる。

また、元来等位接続詞は“和”よりもむしろ“与”が主流であったが、五四以降の使用頻度の向上に伴って、“和”が次第にその機能を拡大して“与”に取って代わり、その過程で“和”は名詞性の語句だけでなく形容詞や動詞性の語句などの接続にも用いるようになった点も指摘されている³⁰⁾。早期の例には、1920年代半ばから30年代の鲁迅、朱自清、巴金のものが数例挙げられている。

さらに、複数の語句の並列（以下「多項接続」）における接続詞の用法については、“A、B和C”のように最後の語句の前に接続詞を置くのが一般的になったのは五四以降のことで、旧白話までは接続詞を使用しないか、“A与B与C”のように複数の接続詞を連用するのが一般的であった（王1943 p360, 賀陽2008 p258）。賀はこれを、英語が“A、B and C”であることに影響された欧化であると考え、老舍の《赵子曰》(1926)、《二马》(1929)から例を挙げているが、変化の具体的な時期には言及していない。

5.2. 徐志摩作品における“和”の用法

(1) 使用頻度

徐志摩における等位接続詞の使用・不使用の割合を、長編小説《贛第德》(1925)を対象に調べてみたところ³¹⁾、表4のように、接続詞を使用したA和B型（多項接続も含む）が119

例見つかったのに対し、接続詞を使用しないA B型は83例で、概ね6:4の割合だった。これは筆者の実感とも合致する。つまり上述したように旧白話では2:8だった接続詞の使用・不使用の割合が、徐志摩の中では老舍より約10年早く旧白話の状態から脱しており、旧白話では使用しなかったような箇所にも接続詞の使用を選択するようになっていたのだ。

次に翻訳作品全体を対象に、等位接続詞“与”、“和”、“同”、“以及/及”の使用数を調査したところ、“与”が285例(59%)、“和”が129例(27%)、“同”が27例(8%)、

表4 《贛第徳》の等位接続詞使用状況

	A和B型	AB型
贛第徳	119 (59%)	83 (41%)

“以及/及”が41例(6%)だった。徐志摩においてはまだ“与”が主流で、“和”はまだ“与”に取って代わるほど多用されていないことがわかる。

(2) 用法上の特徴

徐志摩は、旧白話では使用しなかったような場合にも接続詞の使用を選択し始めていたが、その用法は定着には至っていなかったようだ。以下の例41-43では、接続詞の使用・不使用、及び選択における揺れを垣間見ることができる。

- 41) 那猩猩那猎猎还是在那里，见了他就吱吱的怒嗷。
- 42) 更使他难堪因为更可气恼的一种情形是他那芳邻猩猩与猎猎也都来凑热闹，…
- 43) 要是在猎猎和猩猩的中间安排一个笼子，…

以上《万牲园里的一个人》より

徐志摩の例で“和”と“与”は、大多数が名詞性の語句を接続している点で一致している。“和”が形容詞や動詞などを接続する例としては1920年代のものがすでに紹介されている³²⁾が、徐志摩の場合そのような例は以下を含め例44、45のような数例しか確認できず、“和”の機能の拡大ははっきりとは確認できなかった³³⁾。

- 44) 他们自己也是供给后来的每对的暂时取乐和谈话的资料。《玛丽玛丽》
- 45) 因为饥饿是生命，野心，好意和聪明，吃饱了就是所有这些的 反面，就是贪婪，愚昧，和衰败。 《玛丽玛丽》

“和”と“与”の用法に比較的明確な相違が見られたのは、多項接続における接続詞の位置である。徐志摩の翻訳作品全体においては、“和”を使った多項接続は15例、“与”が14例、その他“以及/及”が18例、“同”が1例見られた。そのうち“和”は全てが“A、B和C”型であったのに対し、“与”では“A、B和C”型でないものが以下の3例、“以及”でも1例が確認できた。

- 46) 他的府第的周围好几里都是软美的青草地与香熟的果子园与啸响的青林，在林子里他不是带了欢笑的同伴打猎，便是伴着他的夫人温柔的散步。 《玛丽玛丽》
- 47) 这是一个充满飘荡的遮胸袋，与裹着黑袜统的小腿与清脆悦耳的声音的世界。 《玛丽玛丽》
- 48) 玛丽与她的母亲，莫须有太太，住在一所高大的黝黑的屋子的顶上一间小屋子里，在都白林城里的一条后街上。 《玛丽玛丽》
- 49) 这回讲他们主仆二人，以及两个女子，两只猴子，一群土人叫做奥莱衣昂的，种种情形。 《赣第德》

五四以前の多項接続では、接続詞は使用されないか、或いは上の例のように“A、B和C”型以外の用法が主流だった³⁴⁾。従って、これらは五四以前に主流だった用法の名残と解釈すべきだろう。

一方で《赣第德》(1925)には接続詞を使用していない多項接続が多く見られるのに気付いた。接続詞使用はわずか15例で、不使用が62例あり、使用・不使用の割合から見ると、多項接続については未だ五四以前の状態に近いように思われる。

つまり、徐志摩の等位接続詞の使用頻度の向上は、主に2つの名詞性成分の接続について、旧白話では用いなかったものに接続詞の使用を選択したことによるものだと言える。1920年代の魯迅、30年代の朱自清の作品中に動詞や形容詞を接続する例が見られる(賀2008 p158-160)ことを考えれば、接続詞“和”の用法に関して1920年代に徐志摩が突出していたとは考えられない。使用頻度は高まりつつあったが、数の上でも、また用法においても、未だ定着していない過渡期にあったと言えるのではないだろうか。

6 結び

以上4つの欧化現象について例文の収集・整理と考察を行った結果、以下のようなことが明らかになった。

1. “当…的时候”と“当”の接続詞的用法については、徐志摩は使用例はあるものの、未だ使用が定着しているとは言えない状態だった。しかし“当”の接続詞的用法については従来の理解よりも早い、1920年代の使用を示す新たな例が確認できた。徐志摩は“当…的时候”と同時期に“当”の接続詞的用法も使用し始めている点で特徴的である。
2. 徐志摩において“它(它們)”の使用は1925年ごろには定着しており、この時期の例文を補充することができる。また“它(它們)”が抽象的な観念や無形物を指す点、複数形の“它們”の多用、“它”と“它們”が文中で果たす文成分の三点で、すでに現代漢語の用法に近く、当時としては際立っていたと言える。

3. 徐志摩は翻訳の初期から複数を表す接尾辞“們”を使用していた。人の複数形については1920年代における単独の作家の使用例としては例をみない数の例が収集でき、また擬人化など一定の条件のもとでは動物や無生物にも“們”を付加しており、他の使用例に比べても若干の柔軟性が感じられる。“人們”については、使用例は確認できたが希少であり、定着とは言い難い。
4. 徐志摩は1920年代の段階で接続詞“和”を積極的に使用するようになっていたが、使用したのは2つの名詞性成分を接続する場合が主で、機能の拡大は顕著ではない。また、接続詞の使用と不使用、接続詞の選択においては揺れがみられた。

このように、現象ごとに使用時期や使用頻度、用法などを詳細に検証すると、徐志摩はすべての欧化現象において欧化の程度が高かったわけではないことがわかる。欧化現象は多岐にわたるため、まだ取り上げていない欧化現象についても整理・検証を急がなければならない。

一方徐志摩の翻訳作品についてはこれまで欧化研究の資料に取り上げられたことがほぼ皆無であったため、これまでに紹介されていない新しい欧化例を収集することができた。これらは、今後の欧化研究において貴重な資料となることが期待できる。

徐志摩は王力によって「欧化の程度が高い」と評されて以降、欧化研究においては顧みられることが少なかったが、彼の文体を精査し、そこに見られる欧化の実体を明らかにできれば、20世紀初頭の中国語と英語の接触が中国語にもたらした影響の解明につながるかと考えている。

なお、本研究はJSPS 科研費 25370500 の助成を受けたものである（研究課題名『清末民国初期華英言語接触所産の華語の特徴についての実証的研究』）。

注

- 1) 王の姿勢は以下に見られる。“这上头只有模仿的事实，没有逻辑上的是非。”（《中国语法理论》p469, pl21），“对于中国语法只说明它有没有某种形式的存在，而不讨论应该或不该有那种形式”（《中国语法理论》p501）“咱们不必抱赞成或反对的态度。”（《汉语史稿》p334）。
- 2) 《五四以来汉语书面语的变迁和发展》（北京师范学院 1959）第三编 五四以来汉语语法的发展的第二章 句法的发展（p156-180）では、徐志摩の例文は全 107 例のうちわずか 12 例だった。
- 3) 贺阳が用いたコーパスは、14 世紀から 19 世紀末までの旧白話から五四前後の新白話、当代の書面語及び口語、さらには現代漢語の口語資料まで幅広い。具体的に挙げられているのは《家庭藏书集锦》（升级版，红旗出版社）、《中国古典名著新百部》（北京银冠电子出版有限公司）、《国学备览》（商务印书馆国际有限公司）、《二十五史全文阅读检索系统》（网络版，南开大学组合数学研究中心，天津永川软件技术有限公司）、80 年代の口語資料を基礎に作成された《北京话口语语料库》（中国人民大学文学院）などである。
- 4) 王力も欧化と翻訳の関係性について「欧化の源は翻訳である。翻訳作品は最も欧化しやすい。なぜなら原文の語順をなぞれば手間が省けるからだ。これは誰でもわかる事実だ。翻訳作品、准翻訳作品、そして西洋語で構想を練った作品—これらが実際のところ欧化語法の源だ。…欧化と翻訳はごっちゃにして語っても差し支えない。」（《中国语法理论》p501）と語っている。
- 5) 本稿の例文の出典は《徐志摩全集》第八卷 翻译作品（2）、韩石山编，天津人民出版社（2005）である。
- 6) 1908 年に商務書館から出版された《商務書館華英字典》の“When”の解説に“当时”が見られる（p374）。一方同字典の“as”の項（p18）は“As, adv.and conj. 如，若，猶若，因為，其時，… as he was at

- home I visited him 他在家時我探訪之；”とされ，“当时”は見られない。
- 7) 王のこの問題についての見解は以下に集約されている。“时间连词最难欧化，因为中国本来没有这种东西。有人拿‘当’字去抵挡‘when’和‘as’，但若说成‘当…的时候’，仍旧只是一种谓语句形式，因为‘当’仍有它的动词性。如果要把‘当’字造成一个纯然欧化的连词应该避免在后面加‘时’字或‘的时候’字样。例如‘when I looked again I saw nothing’只该译为‘当我再看，我看不见什么’，但是截至现在为止，欧化还没有达到这一个阶段，至少大多数的情形是如此。”）《中国语法理论》p471
 - 8) 贺阳 (2008) p140, 表 5-4 介词“当”的使用频率变化を参照されたい。“当…的时候”の使用頻度は《红楼梦》では 0.7%, 1918 年から 22 年の鲁迅の作品では 4.4% だが、同じく鲁迅の 1930 年代の作品では 20.6% に増えている。また 1996 年に出版された外国語の翻訳小説では 54.9% だが、同時代の中国語をオリジナル言語とする小説では 28.2%, さらに 1989 年の口語資料では 0.2% だった。
 - 9) 贺阳 (2008) p144, 表 5-5 “当” 连词用法发展を参照されたい。ここでは李国文 (1930-) 以降、主に 80 年代以降の作品が挙げられている。
 - 10) 注 8 を参照されたい。
 - 11) 日本語訳は「ところが彼女は、胴衣の前を押し込むフェイスのちょっとした滑稽な癖—まるでそこにも小さな、秘密の木のみに蓄えているかのような癖—に気づいた時、パーサは手に爪を立てなければならなかった—あまり笑わないようにするために。」(『マンスフィールド全集』大澤銀作・相吉達男・河野芳秀・柴田優子訳 新水社 1999)
 - 12) 日本語訳は「彼女が仰向けに寝て、真珠の首飾りをあごの下にすべり込ませながら『ねえ、喉がかわいたわ。オレンジを持ってきてよ』とため息まじりで言ったりしたら、私は喜んで、気持ちよく、ワニの口の中に飛び込んでオレンジを取りに行ったであろう。—もちろんワニがオレンジを飲み込んだとしての話であるけれども。」(『マンスフィールド全集』1999)
 - 13) 注 7 を参照されたい。王は最後に「しかし、現在までのところ欧化はまだこの段階まで来ていない」と語っており、“当…” が未だ市民権を獲得していないという認識を示している。
 - 14) 贺阳 (2008) p72, 表 3-1 を参照されたい。旧白話小説では“它”の使用例はなかったのが、《骆驼祥子》以降の作品では一定数使用されており、その使用頻度の向上は比較的顕著である。
 - 15) この点に関する王の指摘は、《中国现代语法》では“中性的第三人称代词，中国语里本来极少极少。把一张桌子叫做‘它’，已经是很少见的了；至于把一种无形的物叫做‘它’，尤其是绝无仅有。”(p367) “在多数情形之下，‘它’字实在太不合中国的习惯了；凡是可以不用的地方，还是不用的好。”(p368) しかし約 10 年後の《汉语史稿》では“本来，指物的‘他’（即‘它’）在汉语里是非常罕见的，至于复数形式更是绝对不用了。但是由于吸收外国语语法的缘故，在书面语言里也渐渐有‘它们’出现了，甚至出现在典型的白话文著作里，例如…”(p268) とトーンダウンしている。以前は変質した欧化として相手にしないという態度だったが、鲁迅でも使用されるに至ってしぶしぶ認めたのだろう。
 - 16) 贺阳が「著名な作家や文化人」として挙げているのは胡适、刘半农、钱玄同、鲁迅、冰心、周作人、郑振铎、茅盾、朱自清、瞿秋白である。
 - 17) 老舍の《骆驼祥子》は中国語がオリジナルであるから、翻訳作品と単純に比較することはできない。しかし徐志摩の 1923 年から 30 年に至る使用数の変化から考えても、徐志摩における“它”及び“它们”の使用が、これまで指摘されている他の例よりも早い段階で定着していると見ることができる。
 - 18) 日本語訳は『マンスフィールド全集』大津銀作・相吉達男・河野芳英・柴田優子訳、新水社、1999 による。
 - 19) 日本語訳は『カンディード 他五篇』植田祐二訳、岩波文庫、2005。なお、ここで“它”と照応関係にあるのは「裁判」だが、中国語“法律上的公道”は「法律上の正義」と理解でき、無形の物に分類すべきであると考えられる。文全体が難解であるため、参考のために日本語訳を転記した。以下《贛第徳》の例文の日本語訳はすべて上記である。
 - 20) 本統計の《红楼梦》と当代作品のデータは贺阳 (2008) の p82 及び p84 の表 3-4 をまとめたものである。「当代作品」とは 90 年代の《散文》、《小说选刊》である。詳細は該当箇所を参照されたい。
 - 21) 《万牲园里的一个人》の日本語訳及び英語原文は [D.GARNETT (I) A Man in the Zoo] 服部英二訳、南雲堂、1960 による。現段階では“它那拉腮胡子”を連体修飾構造と理解してよいかどうか、確信

- がない。原文は “they walked slowly from cage to cage until they came to a tiger which walked up and down, up and down, up and down, turning his great painted head with intolerable familiarity, and with his whiskers just brushing the brick wall.” なので、“它那拉腮胡子”は his whiskers 「そのひげ」(服部英二訳)と理解すれば連体修飾構造と考えられる。
- 22) 本論では“人伦”を「人と人との間柄・秩序関係を表す呼称」(小学館『デジタル大辞泉』)と理解し、“人伦的称呼”を便宜上「人倫呼称」と記すことにする。
- 23) 贺阳(2008 p189)によると、《水浒传》前40話のうち人称代名詞を除くと、名詞(N) + “们”が113例あり、そのうちN = 人倫呼称が39例(34.5%)、N = 人倫呼称以外の人を表す名詞が74例(65.5%)だった。
- 24) 明代の《老乞大》、《朴通事》、《元朝秘史》などにも例をみることではできるといえるが、当時の少数民族の言語習慣に影響されたもので、中国語の伝統的な習慣ではないと考えられている。この点については贺(2008 p181)に詳しい。さらに五四以降の例として魯迅や老舍にも複数の例が知られている。
- 25) Nの分類は“们”の使用範囲の拡大を知る重要な手がかりで、これまでも「人倫呼称」「非人倫呼称」「業種・職業」「類を表す名詞」などで分類が試みられたが、いずれも曖昧な点があり同意しかねるところである。今回は徐志摩の使用例をわかりやすく整理するため、ひとまず本文のとおり分類しておく。
- 26) “魔鬼”が動物なのか無生物なのか、現段階では判断がつかない。いずれにしても擬人化を意図した用法であることは伺える。
- 27) “和”は等位接続詞“以及”“及”“同”“与”の総称と理解されたい。
- 28) 贺阳(2008) p149 表6-1を参照されたい。
- 29) 王の具体的な言及は次のとおり。“欧化的文章里，就普通说，联结成份比非欧化的文章里多。”(欧化した文章は、そうでない文章よりも連結成分が多い。)《中国现代语法》p359 “现代欧化的文章对于积累式的连词，虽未达到完全模仿英文的程度，…但是，用‘与’和‘而且’的地方总比从前多了几倍。”(欧化した文章は累加的接続詞について、完全に英語を模倣するところまではしていない…、しかし“与”や“而且”を使った箇所は以前の何倍にもなった)《中国语法理论》p469
- 30) 贺阳(2008) P157 表6-4と表6-5を参照されたい。王(1958 p330-331)でも指摘されている。変化の時期についてはいずれも明確に述べていない。
- 31) 接続詞は“和”、“同”、“与”、“以及”と“及”について調査した。
- 32) 贺阳(2008) p158-p160には“和”が動詞性の語句、形容詞性の語句、連用修飾語を接続する例が紹介されているが、1920年代半ばの魯迅、朱自清、老舍、30年代の茅盾が含まれている。しかしそれぞれの作家の中でどの程度定着していたのかは不明である。
- 33) “与”では名詞以外に動詞性の語句を接続する例が散見された。たとえば以下である。“她自己逼窄的舒服的生活，新近为了共产党到处的闹也感觉不安稳与难过，这一比卜来显得卑鄙而且庸劣了。”《生命的报酬》，“睡饱了醒来就找女人，在烂房子灰堆里凑在死透的与死不透的尸体中间，寻他的快活。”《赣第德》，“惶急与羞愧使得他全身发汗。”《蜿蜒：一只小鼠》
- 34) 贺阳(2008) p259 表9-1 多项并列结构中连词的位置变化を参照されたい。この統計では、五四以前の多項接続では、全体の37.8%にしすぎなかった“A、B和C”型が、“现当代汉语文本”では96.4%に達したことが示されている。

参考文献

- 王力 1943 《中国现代语法》，商务印书馆，1985年版
 王力 1944 《中国语法理论》，《王力文集》(第一卷)，山东教育出版社，1984年
 王力 1958 《汉语史稿》，中华书局，2012年版
 北京师范学院中文系 1959 《五四以来汉语书面语言的变迁和发展》，商务印书馆
 大原信一 1994 『近代中国のことばと文字』，東方書店
 崔山佳 2013 《汉语欧化语法现象专题研究》，四川出版集团巴蜀书社

- 贺阳 2008《现代汉语欧化语法现象研究》，商务印书馆
余光中 2002 余光中说徐志摩《偶然》，《名作欣赏》2002，第三期
穆木天 1934 徐志摩论—他的思想与艺术，《文学》1934，第3卷 第1期
邵华强 2011《中国文学史资料全编 66 徐志摩研究资料》，知识产权出版社
徐志摩著：虞坤林整理 2003《徐志摩未刊日记》，北京图书馆出版社
T.Theodore Wong and W.W.Yen 1908《商務書館華英字典》，商務書館

例文出典

- 《徐志摩全集》第八卷 翻译作品 (2)，韩石山编，天津人民出版社，2005
『マンスフィールド全集』大津銀作・相吉達男・河野芳英・柴田優子訳 新水社 1999
『カンディード 他五篇』植田祐二訳 岩波文庫 2005
『D.GARNETT (I) A Man in the Zoo』服部英二訳，南雲堂，1960

The Europeanization phenomenon to be seen in translation works by Zhimo XU

Mitsuyo SEKI

Abstract

This paper is a study to demonstrate the influence on the Chinese language that Chinese and English contact had in the early 20th century. Focusing on the translation works of Zhimo Xu, this study looked for sample sentences utilizing “当…的时候”, “它（它们）”, the suffix “们” and the conjunction “和”, and investigated how often they occurred and how they demonstrated the phenomenon of Europeanization.

Analysis lead to the following findings. A lot of new sentences that have not appeared in research until now were found. Until now, Zhimo Xu has been well known as an author who was greatly influenced by Europeanization. However, this study shows that while at times his adoption of Europeanized words and phrases was ahead of his time, in other cases he was not. Similarly, in certain cases he used Europeanized words and phrases more than other writers, while in other cases it was at a similar rate. Finally, in a number of cases he was very flexible in how he used the Europeanized language.

The next stage of study after this will be the investigation of other indicators of Europeanization in his work leading to a fuller description of his Europeanization. It is expected that the new sentences found here will offer valuable primary source material for future study of Europeanization in Modern Chinese.

Keywords: Zhimo XU, Europeanization, translation works, established use, Modern written Chinese

